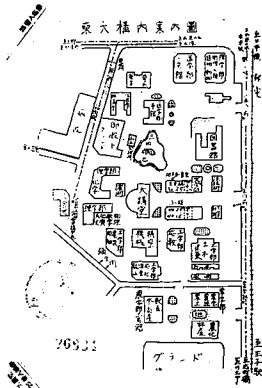


東京大学史料室ニュース

第6号 1991・3・30

目次

- 饗膳のあとかたづけのゴミため 2
- 達(たっし) 4
- 東京大学史料の保存に関する委員会委員名簿 5
- 沿革史紹介 6
- 受贈図書一覧 7
- 史料室日誌抄録 8



各学部教室公開

5月5日(水) 9時～17時

【法 学 部】

- 法政学系 法政学系講義室(1階)
- 法政学系 法政学系講義室(2階)
- 法政学系 法政学系講義室(3階)
- 法政学系 法政学系講義室(4階)
- 法政学系 法政学系講義室(5階)
- 法政学系 法政学系講義室(6階)
- 法政学系 法政学系講義室(7階)
- 法政学系 法政学系講義室(8階)
- 法政学系 法政学系講義室(9階)
- 法政学系 法政学系講義室(10階)

【文 学 部】

- 文学部 文学部講義室(1階)
- 文学部 文学部講義室(2階)
- 文学部 文学部講義室(3階)
- 文学部 文学部講義室(4階)
- 文学部 文学部講義室(5階)
- 文学部 文学部講義室(6階)
- 文学部 文学部講義室(7階)
- 文学部 文学部講義室(8階)
- 文学部 文学部講義室(9階)
- 文学部 文学部講義室(10階)

【理 学 部】

- 理学部 理学部講義室(1階)
- 理学部 理学部講義室(2階)
- 理学部 理学部講義室(3階)
- 理学部 理学部講義室(4階)
- 理学部 理学部講義室(5階)
- 理学部 理学部講義室(6階)
- 理学部 理学部講義室(7階)
- 理学部 理学部講義室(8階)
- 理学部 理学部講義室(9階)
- 理学部 理学部講義室(10階)

研究文化団体公開

5月5日(水) 9時～17時

【文 化 会】

- 文化会 文化会講義室(1階)
- 文化会 文化会講義室(2階)
- 文化会 文化会講義室(3階)
- 文化会 文化会講義室(4階)
- 文化会 文化会講義室(5階)
- 文化会 文化会講義室(6階)
- 文化会 文化会講義室(7階)
- 文化会 文化会講義室(8階)
- 文化会 文化会講義室(9階)
- 文化会 文化会講義室(10階)

【法 学 部】

- 法学部 法学部講義室(1階)
- 法学部 法学部講義室(2階)
- 法学部 法学部講義室(3階)
- 法学部 法学部講義室(4階)
- 法学部 法学部講義室(5階)
- 法学部 法学部講義室(6階)
- 法学部 法学部講義室(7階)
- 法学部 法学部講義室(8階)
- 法学部 法学部講義室(9階)
- 法学部 法学部講義室(10階)

【文 学 部】

- 文学部 文学部講義室(1階)
- 文学部 文学部講義室(2階)
- 文学部 文学部講義室(3階)
- 文学部 文学部講義室(4階)
- 文学部 文学部講義室(5階)
- 文学部 文学部講義室(6階)
- 文学部 文学部講義室(7階)
- 文学部 文学部講義室(8階)
- 文学部 文学部講義室(9階)
- 文学部 文学部講義室(10階)

第25回五月祭プログラム (昭和26 (1951) 年)

(19cm×51.5cm)

五月祭の起源は、大正12 (1923) 年5月5日に行われた新入学生の歓迎会を兼ねた学友会大会の園遊会であった。この園遊会は、学内の学生相互の交流を深めることを目的とし、大学側と学生とが一体となって催されたものであった。

この後、この全学大懇親会は毎年5月に催され、次第に盛況を呈していった。昭和3 (1928) 年に至り、主催者であった学友会が解散してしまい、中止のやむなきに至ったが、翌4年には各学部会が連合して全学開放として復活した。この頃より学内のみならず一般にも門戸を開き始めたと思われる。その後、昭和8年頃より、この全学開放は「五月祭」と呼ばれるようになり、それが次第に一般化していった。そして「五月祭」は戦時中の中断はあったものの、それぞれの時代相を反映しながら現在に至り、毎年盛大に催されている。

饗膳のあとかたづけのゴミため
(本郷構内の発掘調査から)

寺島孝一

山上会館・御殿下記念館の建設を契機として始まった本郷構内の発掘調査は、その後法学部4号館・文学部3号館、理学部7号館さらに病院地区へと拡大し、1980年代後半は、総長を初めとして庶務部・施設部・文学部そして発掘調査担当者が、広大な面積の発掘を続けながら、学内における発掘調査の在り方を模索した時期であった。

臨時措置として発足した「遺跡調査室」は、全学的な論議の中で恒常的な存在の必要性が確認されて、「東京大学埋蔵文化財調査室」として再発足し、すでに農学部ベテリナリーメディカルセンター・附属病院外来診療棟の発掘を新体制のもとで終了している。

発掘調査報告書も、「遺跡調査室」時代に行った4地点のものが、『山上会館・御殿下記念館地点』の報告書を最後に、すべて刊行されるにいたった。これらの報告書では「先土器時代」から「江戸時代」に至る構内の発掘の成果が詳しく記されており、本郷キャンパスの前史を考古学的に、また江戸時代については文献史学等も含めて多方面から研究が行われている。



第1図 饗膳のあとかたづけのゴミため

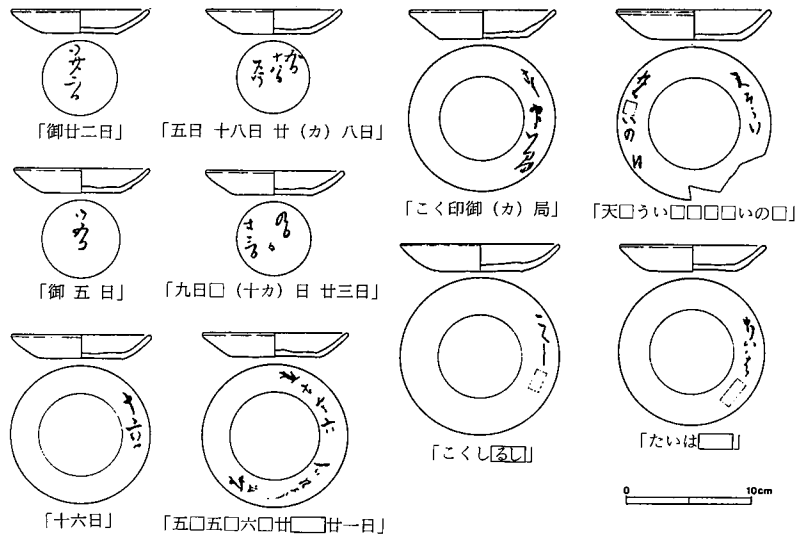
発掘で確認された遺構は江戸時代のものが圧倒的に多く、また遺物もこの時期のものが数多く出土している。建物跡では19世紀初頭に建てられた「梅之御殿」や「馬屋」の跡など大規模で人目を引いたものがあり、また遺物では病院地区で数多く見つかった「古九谷」は陶磁史学界に大きなインパクトを与えた。

ここでは紙数も限られているため、「御殿下記念館地点」で見つかったごく小さな「ゴミ穴」を例にして構内遺跡の発掘の一端を紹介したい。

この穴が見つかったのは御殿下グラウンドの中央からやや北よりの、山上会館に近い所である。周知のことではあろうが、現在の「赤門」を入ったあたりに宏大な藩主の居宅があり、現在の「三四郎池」およびその周辺は「育徳園」と呼ばれた庭園であった。この東側すなわち現在のグラウンドは馬場や馬屋として使われる時期が多かった。この穴が掘られたのは育徳園から坂を下り平坦部に移る境界点にあたる。

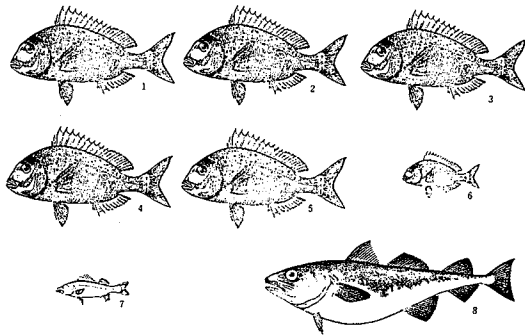
この穴は縦約2メートル、幅が約1メートルの角が丸い長方形で、深さは50センチ弱であった。この中から大量のカワラケ（素焼きの皿）と魚の骨、鳥の骨そして炭化物が見つかる（第1図）。この穴の年代は同時に見つかる陶磁器などから17世紀末から18世紀初め頃と推定した。尚この時期にはグラウンド北部には藩務を行う公的な建物が建てられていたようである。

ここで発見されたカワラケには外面に墨書の有るものが多く見られた（第2図）。墨がかすれて読めないカワラケも多かったが判読可能なものでは、日付を記したものが多い。日付は一つを書いたもの、三つほどを列記したものがあり、書かれた位置は底部、または側面であった。読めた日付は「五日」から「二十八日」まで殆どすべての日が網羅されている。日付以外では「こく印御^(あ)局」「こくし



第2図 「かわらけ」に見られる墨書

(読みは史料編纂所 宮崎勝美氏、文学部国史研究室 杉森哲也氏による)



第3図 廃棄穴でみつかった魚(骨)の大きさと個体数:約10分の1
(早稲田大学 金子浩昌氏作成)

る(カ)し(カ)」などがあり、他にも判読不能のものが幾つかあった。

魚骨は大型のマダイが中心で、少なくとも5体以上が捨てられており(第3図1~6)、他にマダラ(8)、スズキ(7)が認められた。魚骨の調査を担当された早稲田大学の金子浩昌氏は、「多くの骨が付き合い、その一つ一つを離すことはできない状態であった」とされ、骨の保存状態は良くないものの、一体あたりの骨の残存量が多い点を指摘している。殆ど原形を保ったまま一度に廃棄されたものであろう。他の炭化物の綿密な調査を行って

いないので食事の全体像はうかがえないが、大型のマダイを中心とした宴会の残滓であることは十分に理解することが出来るものであろう。

日常生活ではなく、儀礼的な場で1回限り用いられるカワラケが大量に廃棄されていたのも、何らかの饗宴が行われ、その食器と残滓が穴を掘って埋められたことを示していると云えよう。

もし、墨書の日付がこの饗宴の日を示しているとするれば、殆ど連日のように行われていたことになるが、魚骨の量とその廃棄状態からみて考え難い。さらに1度限りのはずのカワラケに複数の日付が書かれているのも謎である。では饗宴の日付でないとするれば、何を意味するのか、今のところ分からないと云うほかはない。今後、文献史学の協力を得て、また発掘調査での似たような発見例を待って解明して行ければと思っている。

わずか1×2メートルの穴にも過去の人々の営みの一端が凝縮されている。文献史料が良く残されている江戸時代においても、発掘調査によって得られるものは多く、近世史に新しい切り口を提起することが可能であろう。

(埋蔵文化財調査室 助教授)

東大の記録管理（2）

達（たっし）

「達」（たっし、と読む）という、随分古めかしく感ぜられるが、本学では昭和55年3月（1980）まで規則の制定には達第〇号という形式がとられていた。

達とは、明治初年に行政機関が発する法令規則等の内、文言の末尾の言葉が「相達候事」などと「達」の字を含んで結ばれるものこと、あるいは達と区分されて発せられたものことと言う。番号が振られる場合は、毎年一号から始まり、太政官第〇号、東京府布達甲第〇号などとされた。古めかしく感ぜられるのは、明治19年2月26日（1886）公布の勅令第一号で「公文式」が制定されたのを機に、従来の布告、布達、達などに代わって、新たに法律、勅令、閣令、省令、訓令といった区別が導入され、それが国レベルだけでなく地方レベルにも波及して、馴染みが薄くなったからである。最近まで達が残っていた本学の例は全国で稀なものであろう。

本学の場合、達は、本学が組織として決定した規則、指示などを組織内に行届かせるシステムであり、かつ時期によっては本学の長が規則を制定する行為と密接に関わっていた。

本学の達の記録は断片的にしか残っておらず、起源がいつまで遡れるか明らかでないが、明治10年代初め、すでに東京大学では達するという慣行が成立していた。明治10年4月（1877）に東京大学が誕生したとき、旧東京開成学校の法理文3学部と旧東京医学校の医学部は、同じ東京大学という名ではあっても

別個の長（総理）を持った独立した組織であった。その法理文3学部では、公文書綴り『校中往復』中に明治14年（1881）年初には達の存在を確認できる。当時、総理名で発する達があり、また大学名や総理室名で発する達もあった。医学部でも同様であったらしい。明治14年7月、法理医文4学部に統一した長（総理）が置かれ（総理はなくなった）てからは、総理がそれまでの総理の達を引継いだ。

明治14年の4学部統一後まもなくの学生と生徒の区分の達が、『東京大学第一年報』に「明治十四年八月二日本科生徒ヲ自今学生ト称スヘキ旨ヲ達ス」（印刷本34頁）と記録されているが、その実際の姿は文例1のようであった。

達には宛名があり、文例1の右下に書かれている学部名がそれにあたる。宛名は基本的に学内の何かであるが、初期には文例2の三井銀行のように学外に宛てたものも見られる。

明治17年（1884）の公文書綴り『校中往復』からは、文例3に掲げたように宛名に「大学一般」が見られる。これは全学宛てであることを示している。この表現は明治15年（1882）の同簿冊には見られないが、明治16年（1883）の同簿冊が散佚しているため、最初が16年か17年か特定できていない。なお、かなり後には大学が増設されてまぎらわしくなったせいか、「本学一般」とか「学内一般」といった宛名が使われることが多くなる。達がなくなってしまった今日でも、学内規則の規則番号の下に記された適用範囲を示す部分に、全学対象の場合「本学一般」が用いられ、達の名残を留めている。

全学の長の名で発する達のシステムは、明

達の文例一（「校中往復」明治十四年四一丁の起案文書より）	東京大学総理加藤弘之
東京大学理学部	
東京大学法学部	
東京大学医学部	
東京大学文学部	
本科生徒之義自今学生ト相唱候 条此段為心得相達候事	
明治十四年八月二日	
達の文例二（「校中往復」明治十四年四三丁の起案文書より）	三井銀行
今般會計主任印刷刻會計主任エ 相渡候ニ付而者自今金銀出納ニ 係ル證票等エ押捺可致候条印影 相添此段相達候事 東京大学	
（別紙の印影省略。起案文書によると日付は、明治十四年八月十八日以降）	
達の文例三（「校中往復」明治十七年四丁の起案文書より）	大学一般
医学部及予備門分費於テ從來毎月一日休業致来候処右者自今相 廃止候条此旨相達候事	
明治十七年一月廿五日	
東京大学総理加藤弘之	

【達の文例四】

〔各分科大学往復〕明治十九年二一〜二丁の実物による）

（回達の副え書き）

帝国大学宛ノ文書等其事項分科大学ノ主管ニ係ルモノ草案之儀ニ付別紙之通御達相成候間及御回達候也

但帝国大学ニ関スル分ハ本学於テ清書シ差立候上草案者可及御返却候也

明治十九年四月廿一日 帝国大学書記

法科大学書記㊦
医科大学書記㊦
文科大学書記㊦
理科大学書記㊦

右御中

追テ回章周尾御返戻有之度候也

達第一号

分科大学

総長若クハ帝国大学宛ノ往復文書等其事項分科大学ノ主管ニ係ルモノハ其大学ニ於テ草案ヲ具シ総長ノ決裁ヲ請フベシ

但分科大学ヨリ往復スル文書ト雖モ外部ニ対スルモノハ総長ノ決裁ヲ経ベシ

明治十九年四月廿一日

帝国大学総長渡辺洪基印

治19年3月(1886)に従来の東京大学と工部大学校が合併されて帝国大学が誕生し、総理に代わって総長が全学の長となって数年の内にはほぼ完成したと考えられる。

その第1は、特に総長名の達には毎年一号から始まる番号が付されるようになったことである。最初の番号付きの達は文例4のもので、明治19年4月21日付けで発せられた。但し、総長達のすべてに番号が付されているわけではなく、何故かしばらくは番号のついていないものもある。

この達は、各分科大学(学部の前身)に宛てたもので、帝国大学内の文書の流れを規定しており、前回紹介した「帝国大学文書取扱規程」の前身にあたる。達本文の前に掲げたのは回達(かいたつ又はかいだつ)の副え書きである。未だガリ版はなく、蒟蒻版も発明されたばかりの当時、達は、簡易印刷物で配付されるのではなく、紙片に肉筆で記されて各宛先を順に回されたのである。各書記の下の㊦は回達を受けた記録である。工科大学書記がないのは、当時まだ虎の門にあった工科大学へは回達ではなく達せられたためであろう。

(以下次号)

(大学院教育学研究科 所澤 潤)

付記：資料の判読にあたって大学院人文科学研究科国史学研究室田浦雅徳氏の助力を得た。

〈参考文献〉

『東京大学における学内規則の作り方』昭和57年、東京大学事務局庶務部庶務課法規掛



東京大学史料の保存に関する委員会委員名簿

委員長	田 中	学	(農)
委員	高 橋	進	(法)
〃	養 老	孟 司	(医)
〃	国府田	隆 夫	(工)
〃	伊 藤	隆	(文)
〃	高 橋	景 一	(理)
〃	岡 崎	哲 二	(経)
〃	鳥 海	靖	(教 養)
〃	三 浦	逸 雄	(教 育)
〃	古 賀	憲 司	(薬)
〃	都 司	嘉 宣	(地震研)
〃	宮 崎	勝 美	(史 料)
〃	黒 田	晴 雄	(図書館)
〃	青 柳	徹	(事務局)
〃	石 上	英 一	(史 料)
〃	益 田	宗	(史 料)
幹 事	横 澤	義 雄	(庶務部)
〃	森 谷	俊 直	(経理部)

平成2年10月14日現在

沿革史紹介

『教養学部四十周年 1949—1989』

東京大学教養学部が、戦後における高等教育の新しい理念を担って、昭和24年に創設されてから、平成元年で40年となり、これを記念して、平成元年7月に本誌は刊行された。昭和54年には、学部創立三十周年を記念して『教養学部の三十年』が刊行されている。

本誌は、B5判で57頁（写真・表紙除く）からなっており、口絵には、1号館時計台のほか銀杏並木など7枚の写真が掲載されている。本文には、この十年間の推移を物語る教官各位の文章を「教養学部報」から抜粋し、教養学部の後期日程や大学院に関する組織説明、研究・教育の内容、教養という理念を巡る根源からの問いかけが、また、教養学部の近い過去と近い未来をめぐる座談会が収められており、あわせて最近十年間の年表とキャンパス地図が付されている。

『総合試験所の50年』

工学部総合試験所が、昭和14年に創設されてから、平成元年で50年となり、これを記念して、平成元年10月に本誌は刊行された。

創立以来総合試験所は、このような記念出版物を刊行したことがなく、資料の収集には大変ご苦労されたようである。なお、創設期の資料（内田祥三史料等）については、本史料室の史料を活用していただき感謝している。

本誌は、B5判で242頁（写真・表紙除く）からなっており、口絵には、創設当時と現在の建物の写真が掲載されている。また、「写真でみる総合試験所の50年」と題し総合試験所設置の勅令、創設当時の建物の図面、創設時から現在までの実験設備、数々の記念写真などが掲載されている。本文は、「創設」、「50年のあゆみ」、「研究部門・研究活動」、「50周年に寄せて」、「共同利用設備の概要」、「事務部門」、「職員」、「財団法人 総合研究奨励会」、「年表」で構成されている。

『新聞研究所40年 その軌跡と将来展望』

新聞研究所が、昭和24年に創設されてから、平成元年で40年となり、これを記念して、平成元年10月に本誌は刊行された。

本誌は、B5判で60頁（写真・表紙除く）からなっており、口絵には、「新聞学から社会情報学へ」と題して、高度情報化という社会の変化に対応して研究対象が拡大し、新聞学から社会情報学へと新たな学問分野の発展と深化が進み始めている姿を、過去・現在・近未来の図面で分かり易く描いている。本文は、所長の挨拶に始まり、「新聞研究所40周年に寄せて」と題し、各界からの祝辞が掲載されており、ついで、「新聞研究所40年の軌跡」では、沿革及び略年譜や研究・教育活動の軌跡が、最後に、「新聞研究所の現状と将来展望」が掲載されている。

『銀の鞍 東京大学乗鞍寮五十年史』

昭和15年の初冬に、飛騨山脈乗鞍岳に建てられた、東京大学運動会乗鞍寮「銀鞍荘」の開寮五十周年を記念して、東京大学運動会より平成元年8月に刊行された。

乗鞍寮「銀鞍荘」は、ラテン語の館・鞍・銀の頭文字をとったVSAの愛称で、多くの人々に親しまれ忘れ難い場所となっている。現在の乗鞍寮は、昭和41年に建てられたものであり、旧寮は新寮が増築された昭和63年に取り壊された。

本書は、A4判で221頁（写真・表紙除く）からなっており、口絵には四季折々の乗鞍岳や寮の風景など13枚の写真が掲載されている。本文は、乗鞍寮の生みの親である地元の方や寮を利用された方々の数々の思い出話などが収められており、乗鞍寮への愛着が結晶して出来上がっている。乗鞍の自然が、訪れた人いかに深い影響を与えるかが伝わってくる。

受贈図書一覧（平成元年10月～平成2年5月）

新聞研究所40年 その軌跡と将来展望 同研究所	平成元年10月	中央大学百年史編集ニュース 第十三号 同大学大学史編纂課	平成元年12月
総合試験所の50年 同試験所	平成元年10月	成瀬記念館 1989 No.5 日本女子大学成瀬記念館	平成元年12月
名古屋大学史紀要 第1号 同大学史編集室	平成元年9月	公州師範大学三十五年史 1948～1983 公州師範大学出版部	昭和58年11月
専修大学110年 同大学	平成元年8月	神奈川大学評論 第7号 同大学広報委員会	平成2年2月
翔風 第26号 台北高校報国校友会	昭和20年7月	京都大学卒業生人名録 1989年版 同大学卒業生名簿編纂委員会	平成2年2月
史学会百年小史 1889～1989 史学会	平成元年11月	大学出版部協会25年の歩み 1988 大学出版部協会	昭和63年6月
東京大学史料編纂所職員組合ニュース 同職員組合	昭和57年9月	法政大学史資料集 第十三集 同大学	平成2年3月
十年史 工学部附属原子力工学研究施設	昭和56年6月	中央大学史紀要 第2号 同大学大学史編纂課	平成2年2月
東京医学 第94巻第1号 東京医学会	昭和62年3月	中央大学史資料集 第六集 (菊池武夫関係史料 二) 同大学大学史編纂課	平成2年3月
戦後大学史 一戦後の改革と新制大学の成立一 戦後大学史研究会	昭和63年10月	神奈川大学史資料集 第六集 同大学	平成2年3月
東京大学法学部 研究・教育年報 同学部	平成元年10月	同志社談叢 第十号 同社史資料室	平成2年3月
銀の鞍 東京大学乗鞍寮五十年史 東京大学運動会	平成元年8月	東京大学教育学部紀要 第29号 同学部	平成2年3月
名古屋大学五十年史 部局史一 同大学	平成元年10月	近代日本高等教育における助手制度の研究 広島大学大学教育研究センター	平成2年3月
名古屋大学五十年史 部局史二 同大学	平成元年10月	東洋大学史資料目録 (三) 同編纂室	平成2年3月
月刊 文献ジャーナル 富士短期大学	平成元年12月	東洋大学史紀要 7 同編纂室	平成2年3月
一宮市博物館年報 (1) 一宮市博物館	平成元年11月	東京大学学生相談所紀要 第6号 同相談所 (本郷)	平成元年
一宮の名宝(III) 一宮市博物館	平成元年10月	近代日本に生きた会津の男たち 会津武家屋敷	平成2年5月
富士論叢 第34巻第2号 富士短期大学学術研究会	平成元年11月	アメリカ研究資料センター年報 第12号 同センター	平成2年3月
中央大学史資料集 第五集 同大学大学史編纂課	平成元年12月	予言ドキュメンタリードラマ台本 M8.5東京直下型大地震 日本テレビ	平成2年

第63回五月祭プログラム

五月祭常任委員会 平成2年5月
 地機で織る
 一宮市博物館 平成2年5月
 一宮市博物館研究紀要1
 一宮市博物館 平成2年3月
 一宮市博物館資料目録(1)
 一宮市博物館 平成2年3月
 東京大学史紀要 第7号
 東京大学史史料室 平成元年3月

東京大学史紀要 第8号

東京大学史史料室 平成2年3月
 日本大学精神文化研究所紀要 第21集
 同研究所 平成2年3月
 波乱の半世紀
 一横浜市の誕生から戦後復興まで一
 横浜開港資料館 平成2年1月
 江戸湾の歴史
 一中世・近世の湊と人びと一
 横浜開港資料館 平成2年4月

史料室日誌抄録(平成2年6月~12月)

- 6.1 金 東京大学大学紛争関係資料受け入れ。 年史」を寄贈
 9.27 木
 6.8 金 文部省訓令の一部改正により、庶務部広報企画課が廃止され同課の所掌事務を庶務部庶務課において所掌することとなった。このことにより東京大学史史料室も庶務部庶務課の所属となった。 } 史料室の整備を実施。
 9.28 金
 10.12 金 『東京大学史史料室ニュース』第5号発行。
 10.14 日 原朗室長の任期満了に伴い田中学農学部教授に室長を委嘱。
 11.19 月 第21回東京大学史料の保存に関する委員会開催。
 11.20 火 国立国会図書館へ「議会開設百年記念議会政治展示会」の展示史料として加藤弘之史料『隣草』を貸し出し。
 12.13 木
 9.21 金 史料室室内を害虫駆除
 12.14 金 平賀譲元総長関係資料受け入れ。
 9.27 木 ポン大学日本文化研究所へ「東京帝国大学五十年史」、「東京大学百 12.17 月 田中館愛橘会より参考のため3名来室見学。

題字 森 亘前総長

東京大学史史料室ニュース 第6号

発行日：1991年3月30日(年2回刊)
 編集・発行：東京大学史史料室
 東京都文京区本郷7-3-1
 電話(3812)2111内線2036
 印刷所：よしみ工産株式会社
 北九州市戸畑区天神1-13-5

Archives Section of the University of Tokyo